地質ニュース503号，6頁，1996年7月
Chishitsu News no.503, p.6, July, 1996

—巻頭エッセイ—

“地質”を死語・廃語にしないために

金 原 啓 司[1)]

清水義範の小説「ことばの国」に廃語辞典という章がある．ページをめくって見ると，今はなつかしいノンポリ，ロハ，E電，洋行，純情など，現在では確かに余り使われなくなってしまった言葉が載っている．読むほどに納得し，ついつい面白おかしくなってしまった．これらの言葉は世の中の移り変わりの中で，自然に使われなくなってしまった言葉といってよい．そのつもりで捜せば，そのような言葉は案外多いのではないだろうか．

広辞苑によれば，廃語とは，「すたれて，現在は全く使用されなくなった言葉．死語と同義」とある．一方，死語の項を見ると，「古く使用され，現在は全く使用されなくなった言語または語彙」とある．しかしながら，広辞苑の説明にはなかったが，廃語と死語には，同義どころか何か本質的な差があるように思える．つまり，廃語は，例えば差別用語のように，人為的に，または意識的にその使用を取りやめた言葉をさし，死語とは時代の移り変わりとともに自然に使用されなくなってしまった言葉をさしているような感じがする．その意味では，上述の小説に上げられた廃語のいくつかは本来は死語と言うべきかも知れない．

ところで，地質学の中でも，最近ほとんど聞かれなくなった用語がいくつかある．例えば新しい学説，プレート・テクトニクスの出現に伴い，「地向斜」や「造山運動」という，それまでは地質学を語るのに必要不可欠であった用語が最近ではほとんどお目にかかることがなくなった．また国内の石炭，金属などの鉱山業の撤退・衰退に伴い，「鉱山」もほとんど廃語・死語になりつつあるのではないか．しかしながら，もっと深刻なのは「地質」の2文字が今や死語になりつつあるのではないか，という危惧である．

最近大学においては教養部の改廃，学部組織の改編・改革が急ピッチで進んでいると聞く．名称の変更に当たっては，内容というより，とりわけマスコミ受けを意識したような名称を使った学部・学科が多く見られるようになってきた．例えば，国際，文化，バイオ，情報，物質，環境等である．国際，文化に至っては，そこでは一体何を教え，何を研究しているのか，すぐには理解することが困難である．

一方，理学の分野では「地質」という用語に替わって「地球」，「地圏」，「宇宙」，「惑星」，「環境」，「自然」という言葉が氾濫し始め，「地質」の2文字が大学から消え去ろうとしている．また，工学の分野でも，「鉱山」は秋田大学に鉱山学部の名称は残っているものの，今や廃語同然となり，それに替わって登場したはずの「資源」も死語寸前の状態にある．現在では「地球システム」，「地球資源システム」，「地球工学」，「建設環境」，「資源素材」といった名称に取って替わられるつつある．産業界との結びつきが理学以上に堅固な工学の世界では，世の中の情勢に敏感なのはやむを得ない面もあろうが，自然科学の基本分野である「地質学」の名称までが大学からまさに消え去ろうとしているのは，なんとも寂しい限りではないか．このままでは地質学は将来，博物学の一分野や趣味としてしか生き残れないのではないか．

地質学は元来，石炭，金属，石油等の地下資源開発の要請に応えて進歩・発展してきた学問と理解している．その意味で鉱山業の衰退に伴って，地質学が斜陽化してきたのではないかと感ずるのは自然なのかもしれない．しかしながら，かりに歴史的生い立ちがそうであっても，今や地球を理解するための基本的な学問に成長した地質学は，地球環境問題が深刻化する昨今，その問題解決のために貢献できる絶好のチャンスが到来しつつあるのではないか．

1) 地質調査所 地殻熱部

キーワード：地質，鉱山，資源